

第 2 章

研修会の充実と調査研究の始まり【昭和46年度～昭和52年度】

開所から4年が経過し、登山研修所の研修会も軌道に乗ってきた昭和46年度からは、新たに「大学山岳部リーダー春山研修会」、「一般山岳団体指導者春山研修会」の2つの研修会を開始した。また、昭和47年度からは山岳遭難救助研修会が始まったが、この研修会は、現在に至るまで毎年開催しているものである。

研修所の新たな施設として、昭和46年3月、独立の人工岩場としては我が国最初のロッククライミング訓練施設が竣工した。この施設は、本体の四角錐台（高さ15m、縦11m、横13m；頂部3×5m）が鉄筋コンクリート造のものである。同年4月には試登会、5月には竣工式を挙げた。翌47年7月には、「ロッククライミング訓練施設利用の手引き」を作成し、より安全で有用な施設利用を目指した。



第1回の山岳遭難救助研修会（昭和47年度）

昭和47年7月には、研修生や講師を室堂などへ運ぶための大型バスを購入した。これにより、移動に要する時間が大幅に短縮され、その分研修内容の充実が図られた。同年11月には、専用の車庫も竣工した。

調査研究の取組も始まり、昭和47年3月の大学山岳部リーダー冬山研修会では、研修生を対象にした体力テストを実施した。それ以降も大学山岳部リーダーを対象にした体力調査をたびたび行った。その他、「大学ワンダーフォーゲル

部に関する調査」「学校における集団登山の実施状況に関する調査」「登山研修所研修会修了者の登山活動に関する調査」なども行った。

また、登山指導に関するテキストも発刊した。「登山指導者研修会テキスト」（昭和45年発刊）の要点をまとめ、登山にも携行できる「登山指導の手引き」や「登山指導者研修会テキスト」の改訂版（昭和48年8月発行、市販）である。昭和48年12月には、立山連峰を理解し、より楽しい山行ができるように、立山周辺に関する歴史、文学、伝説、動植物、気象、地質及び登はんルート等について執筆した「立山連峰」（市販）を発刊した。



ロッククライミング訓練施設の竣工式（昭和46年5月8日）

新しい取組もあった。視聴覚を通して登山技術の基礎的な知識や技術を理解させるとともに、

的確な技術を体得させることを目的に、教材用映画「岩登り技術（基礎編）」（昭和48年度）、「岩登り技術（応用編）」（昭和49年度）、「冰雪技術」（昭和50年度）、「山岳スキー技術」（昭和51年度）、「山岳遭難救助技術」（昭和52年度）の5本の教材映画を制作した。



ロッククライミング訓練施設竣工記念の手ぬぐい

1 高等学校・高等専門学校の登山指導者を対象とした研修会

この研修会は、高等学校や高等専門学校の登山部顧問等の指導者を対象に、登山に関する理論と実技について研修を行い、指導者としての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 高等学校・高等専門学校登山指導者春山研修会

【研修時期・期間・場所】

5月上旬～5月下旬・7～8日間・登山研修所及び立山、大日岳、劔岳周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として雷鳥沢や劔沢周辺において雪上歩行訓練、氷雪登はん技術、危急時対策（救急法、負傷者の搬送）、雪上での幕営生活技術、山スキー技術の研修を行い、座学として、「トレーニング」、「健康管理」、「救急法」、「登山計画」、「山岳気象」に関する講義を行った。研究討議は「登山部活動上の諸問題」をテーマに実施した。

【エピソード】

昭和46年度は、同年3月に完成したロッククライミング訓練施設を活用した研修が行われた。この施



人工岩場を使った最初の研修会



スキー歩行訓練（雷鳥平）

設は安全性が確保された中で基礎技術の研修に集中できることから、講師、研修生から高い評価を得た。

昭和47年度は、参加者が15名と特に少なく1班を3名（5班編制）としたため共同装備の分担が多くなり、ザックの重量が40kgを越す者が多数いた。そのため、入山日の行動は十分な時間の余裕をみて計画したにもかかわらず、幕営地到着が1時間半遅れる班もあった。

昭和49年度以降には、研修期間を8日間から1日短縮した7日間とした。それまで、実技研修場所は雷鳥沢をベースに雄山、大日岳方面が中心であったが、昭和50年度以降には、劔沢にベースを移して劔岳周辺で研修を行うようになった。

高校の教職員が参加しやすいように中間考査直前の時期を外すなどして研修日程の調整を図っていたが、この7年間の研修会参加者は平均20名と少なかった。研修会の参加を辞退した者の中には、日程だけが問題ではなくピッケルやアイゼン等の高価な装備を用意することができなくて断念した者もいたようだ。昭和51年度、昭和52年度は、一般山岳団体指導者春山研修会と併行して実施した。

この春山研修会は昭和52年度をもって終了した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者は20名だった。最多は昭和52年度の24名、最少は昭和47年度の15名だった。主任講師は恩田善雄が3回、沢入保忠、氏原毅、濱田啓司、新妻徹が各1回担当した。

(2) 高等学校・高等専門学校登山指導者夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

8月上旬・7～8日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、劔沢で幕営しながら劔岳周辺で歩行技術、登はん技術、幕営生活技術、危急時対策の実技研修を行い、研修所では「登山の装備、食糧」、「山岳気象」に関する講義、研究討議、人工岩場を利用した岩登り基礎技術の研修を行った。

【エピソード】

昭和46年度には、初めての試みとして上級班による劔岳南壁の登はん、内蔵助平でのビバーク等の実践的な研修を行った。講演講師の横有恒は、全期間研修生と行動を共にして積極的な指導を行った。

昭和49年度からは研修期間を1日短縮し7日間の日程で開催されるようになった。昭和50年度には、



負傷者の搬送訓練



前進基地下の幕営地

危急時対策訓練としてツェルトザックによるビバーク研修を行った。全員が未経験の研修であったため、地形の利用や保温方法等について貴重な経験を積むことができた。

昭和51年度は、入山中に台風が接近したため、夏山前進基地を活用して研修を実施した。前進基地において、研修生の判断力や安全対策の能力を向上させる目的で危急時対策の研修や講師の失敗談等の紹介をしたことで、台風が接近する中でも効果的な研修を行うことができた。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は37名だった。最多は昭和46年度の52名、最少は昭和52年度の29名だった。主任講師は沢入保忠が3回、伊藤茂、松田敏、相沢鎮夫、野村哲也が各1回担当した。

(3) 高等学校・高等専門学校登山指導者冬山研修会



イグルー構築訓練

【研修時期・期間・場所】

1月下旬～2月中旬・7～8日間・登山研修所及び人津谷、前大日、大品山、歙崎山周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として人津谷方面や大品山方面において歩行技術（雪崩の危険に対する判断、わかんじきの使用法、スキー利用の登高）、登はん技術（深雪中におけるラッセル、わかんじき、



スキーでの登高（人津谷）

ピッケル、ストックの使用による登はん、ザイルの使用法)、生活技術(生活態度、冬山幕営、炊事・テント内の処理、雪洞・イグルーの建設)、危急時対策(事故発生時における判断、処置、連絡、トランシーバーの使用法、救急法、負傷者の運搬など)を実施し、研修所において、「登山事故と責任」、「積雪と雪崩」、「冬山気象」等に関する講義、「登山部活動の課題」などをテーマにした研究討議を行った。

【エピソード】

昭和48年度と昭和50年度は豪雪により雪崩の危

険性が高かったため、冬山前進基地方面へは入山せず、大品山、鉢崎山周辺で研修を行った。昭和48年度までは、研修期間が8日間であったが、昭和49年度からは、研修の期間を1日短縮し7日間とした。

この研修会は昭和52年度をもって終了した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は23名だった。最多は昭和46年度の30名、最少は昭和50年度の13名だった。主任講師は沢入保忠が2回、速水潔、桑原信夫、新妻徹、伊藤茂、松田敏が各1回担当した。

2 大学山岳部のリーダーを対象とした研修会

この研修会は、大学山岳部のリーダーを対象に、登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 大学山岳部リーダー春山研修会

【研修時期・期間・場所】

5月中旬～6月上旬・7～8日間・登山研修所及び大日岳、立山、劔沢、劔岳周辺

【研修内容】

昭和46年度、新たに大学山岳部員を対象にした春山研修会を開設した。春山登山に関する理論と実技について研修を行い、リーダーとしての資質の向上を目的とした。実技として、歩行技術、登はん技術(ピッケル、アイゼンの使用による登降、ザイルの使用法)、生活技術(雪上幕営)、危急時対策を研修し、「山岳気象・天気図の書き方」、「登山の装備」、「リーダーシップ」等の講義、「大学山岳部に関する諸問題」などをテーマにした研究討議を行った。

【エピソード】

昭和46年度から始まったこの研修会では、春期でも夏山前進基地が使用できる見通しがついたた



滑落停止訓練(劔沢)

め、幕営地を劔沢にしている。雷鳥沢をベースにするよりも、訓練場所の豊富さ、雪質の良さ等のメリットがあり、大きな成果を上げている。

昭和47年度は入山日がみぞれ混じりの風雨と雷に見舞われ、劔沢まで入るこ



歩行訓練(劔沢)

とができず、幕営地を雷鳥平に変更して研修を実施した。以後の実技も雷鳥沢をベースに浄土山、雄山、別山、大日岳、劔沢周辺と毎日変化に富んだゲレンデで実施している。

昭和48年度までは8日間の日程で実施したが、それ以降は1日短縮の7日間の日程となった。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は45名だった。最多は昭和50年度の59名、最少は昭和46年度の28名だった。主任講師は、橋本誠二、中島啓、野村哲也が各1回、松永敏郎が4回担当した。



ニッサンディーゼル 5R-106-0272

昭和47年7月に大型バス（ニッサンディーゼル）を購入し、同年11月には専用の車庫も完成した。購入前はケーブルカーと高原バスの乗り換えに要する時

間も長く、重いザックを移動させるのが大変であったが、大型バスを利用することにより研修所から室堂まで80分から90分で移動できるようになり、その短縮させた移動時間を研修会に効果的に使うことができるようになった。参加者が多い大学山岳部リーダー夏山研修会では、研修生と講師は大型バス、ザックはトラックで運んだ。

当時の道は未舗装で天気の良いと砂埃が立ち、雨が降るとぬかるむ悪路であった。道幅も狭く、バスのすれ違いは特定の場所でしかできなかった。有料道路は1回の通行で50,700円が掛かり高額であったので、研修会中は研修所に戻ることはせず室堂にバスを待機させた。運転手を務めた

技官の佐伯正雪は、年数回の大型バスの運転で、かつ、坂やカーブがほとんどの危険な道路を大勢の研修生や講師を乗せて運転しなければならないことから、運転前日は飲酒を控え最高のコンディションで運転日当日を迎えることを心掛けたという。

こんな大変な仕事もあった。大勢の研修生が乗ると、研修生活で汚れた身体や荷物により車内が汚れ、汗臭くなることから、座席に特製のシートを被せて運行したということである。下山後は、車体の清掃と車内の清掃に丸一日を要した。（佐伯正雪談）

便利な大型バスであったが、行政改革委員会より、年4回程度しか使用しないこと、車検経費がかさむことなどの指摘を受け、購入4年ほどで廃車とした。



雄山神社（芦峯中宮）でのお祓い

(2) 大学山岳部リーダー夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

8月下旬・8日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、劔岳周辺において、登山技術、歩行技術、危急時対策、天気図の作成と観天望気、幕営生活技術の実技研修を実施し、研修所において、「救急法」、「登山計画」、「地形、地質、岩石」等の講義、人工岩場を利用した岩登りの基礎技術研修を実施した。

【エピソード】

昭和46年度は、入山期間を1日延ばし5日間と

した。実技研修では、八ツ峰VI峰やチンネの岩登りから劔岳本峰を踏むコースや通称ア라운드劔と呼ばれるコース等、各班のレベルに応じたコースで実施された。また、夏山前進基地に全員集合して行うミーティングの回数を減らし、各班の講師を中心にテント内でミーティングを行ったところ、活発な意見交換をすることができた。

昭和48年度の研究討議では、遭難対策について全員で討議した。特に、遭難事故を起こした大学の事故の内容、事後処理等についての報告及び講師の体験談を中心に進められた。



前進基地へ向かう研修生（雷鳥坂）

昭和48年度までは8日間の日程で実施したが、それ以降は1日短縮の7日間の日程となった。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は41名だった。最多は昭和46年度の50名、最少は昭和48年度の36名だった。主任講師は、宮下秀樹が2回、野村哲也、小山貢、沢入保忠、湯浅道男、村井葵が各1回担当した。



人工岩場での登はん訓練

(3) 大学山岳部リーダー冬山研修会

【研修時期・期間・場所】

3月上旬・7～8日間・登山研修所及び人津谷、前大日岳周辺、歙崎山

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として冬山前進基地をベースに、雪上登降ルート判断、スキー利用の登降、気象変化、雪崩と捜索について研修し、研修所において「健康管理とトレーニング」についての講義、「大学山岳部のあり方や海外登山」、「遭難対策」等をテーマに研究協議を行った。

【エピソード】

昭和46年度は、冬山研修会として初めて実技期間を5日とした。順天堂大学の運動生理学教室に依頼し、参加者の体力・運動能力調査を実施している。昭和47年度は、スキー初心者の参加が多かったため、参加者のスキー技能と登山経験の双方を吟味して慎重な班編成を行った。



研修所内でのスキー訓練

昭和48、49年度は、安全性を確保するために実技研修の場所を大品山、歙崎山方面に変更している。

昭和50年度は、冬山前進基地をベースに実技研修を行った。ゾンデ棒を使用した雪崩埋没者捜索訓練は、雪崩についての認識が浅い研修生にとって効果的なものだった。この年は研修所ではなく冬山前進基地を活用して研究討議を実施した。

昭和51年度は、入山中に3月上旬としては珍しい大寒波（輪島上空500mb マイナス42℃）が通過し、激しい風雪と多量の降雪に見舞われ、研修生は冬山らしい厳しさを体験することができた。

昭和52年度は、冬山前進基地から大日岳を往復するロングラン研修を行っている。早乙女岳から上部が無風快晴で、充実した研修を行うことができた。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は44名だった。最多は昭和47年度の52名、最少は昭和46年度の39名だった。主任講師は、湯浅道男が4回、松永敏郎、村井葵、斎藤惇生が各1回担当した。



体力・運動能力調査

本研修所では、①登山の指導者養成、②登山に関する調査研究、という二つの大きな柱で事業を展開してきた。ここでは後者の中から、運動生理学、体力学、トレーニング学といった、登山者の身体面に焦点を当てて行われた調査研究を紹介したい。

たとえば『登山研修』の第1巻(昭和60年)には、冬山登山の身体負担に関する研究成果が発表されている。4日間の冬山登山中の心拍数を計ってエネルギー消費量を推定したり、登山の前後で血液や尿の検査をするなど、本格的な調査を実施している。その結果、1日の消費エネルギーは約5000kcalに達するが、3200kcalのエネルギーしか補給できていないこと、尿検査の結果からは疲労が蓄積していること、などを明らかにしている。



登山の身体負担に関する調査研究(昭和50年度)

当時の最難ルートであった唐沢岳幕岩で、ハードな登はんを対象とした研究も行っている。当時46歳の柳澤昭夫氏ら6名が3パーティに分かれ、それぞれ3つのルートから4～9時間をかけて登はんした。そして、身体各部の筋の使われ方を筋電図を用いて調べたり、心拍数を計測したり、

直腸温まで測定している。このような本格的なフィールド研究は、その後は行われておらず、貴重な資料である。

これらの調査研究は、順天堂大学の運動生理学教室(青木純一郎教授が主宰)が中心となり、昭和46年～63年頃まで精力的に行われた。昭和48～52年には5年連続で大学生リーダーの体力測定を行っており、「研修生の体力差は大きく、半数はもっとトレーニングをすべきである」との指摘が残されている。

この他にも、登山者のトレーニング状況の調査や、高校生山岳部における活動の調査など、多様な取組が行われ、それらの成果が折々の『登山研修』に発表されている。

私自身は、平成10～11年にかけての大学生の研修会で調査研究に携わった。上記の研究成果を受け継いで、研修生や講師の体力測定をしたり、登山中の体調や疲労、登山前後での体力の変化を調べた。新しいテーマとしては、標高2400mの剣沢に数日滞在することで4000mレベルの高所に対するある程度の順応が起こることを、低酸素室を利用して明らかにしたりした。

しかし、平成12年頃からこのような分野での本格的な調査研究は下火となっている。他のスポーツに比べて登山では、身体面の問題について研究すべきことがまだ多い。安全登山の普及のためにも、また、より高度な登山を目指す人のためにも、昔のような活発な調査研究が行われることを願っている。

(山本正嘉)



トレーニング室での体力測定(平成11年度)

3 一般山岳団体の指導者を対象とした研修会

この研修会は、一般山岳団体のリーダーを対象に、登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

(1) 一般山岳団体指導者春山研修会

【研修時期・期間・場所】

5月下旬、6月上旬・6～7日間・登山研修所及び
劔岳周辺

【研修内容】

この研修会は、先に行われていた一般山岳団体指導者研修会（夏山、冬山）と同様の目的で、春山をフィールドとして昭和46年度から開催した。実技研修として、劔沢周辺において雪上歩行訓練、氷壁登はん訓練、雪上幕営生活技術、危急時対策を実施し、研修所において「登山のためのトレーニング」、「登山計画」、「登山の装備」、「山岳気象」の講義、「一般山岳団体の諸問題」についての研究討議、人工岩場を利用した岩登り基礎技術の研修を行った。



昭和52年度の研修生

【エピソード】

この研修会は、基本的に7日間の日程で開催したが昭和49年度のみ6日間の日程で実施した。昭和46年度から7年間実施され、昭和52年度をもって終了した。

従来から女子のための積雪期の研修会を開催してほしいとの要望が強かったので、昭和50年度から女子の参加を認めることとした。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は18名だった。最多は昭和52年度の24名、最少は昭和49年度と昭和50年度の16名だった。主任講師は、増子春雄が5回、野村哲也、中野満が各1回担当した。



雪上歩行訓練（長次郎谷）

(2) 一般山岳団体指導者夏山研修会

【研修時期・期間・場所】

7月下旬、8月中旬、8月下旬、9月上旬・7日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として、劔岳周辺において歩行技術、登はん技術、幕営生活技術、危急時対策を実施した。講義は、「登山の食糧」、「登山と地形、地質」、「山岳気象」等、研究討議は「一般登山者の指導と組織化」、「団体における指導法の確立」等をテーマに実施した。

【エピソード】

昭和47年度の実技研修では、劔沢をベースにして周辺の各訓練場所の特徴を活かした効果的な研修を実施している。その内容は、第1日目は、入山、テント設営完了後、救急手当の講義と実習、第2日目は別山岩場で登はん、別山を経て内蔵助沢上部の雪上において確保技術研修、第3日目は八ツ峰Ⅵ峰フェース及び上半ルートを経て本峰、第4日目は再び別山岩場で岩登り研修、第5日目は下山、という内容であった。

昭和50年度には、研修会では初めての社団法人日本



岩場での研修（別山岩場）

山岳協会第2種指導員の検定科目のうち「岩登り技術」の検定を実施した。受検者は男子6名、女子1名であった。

この研修会は、基本的に7日間の日程で開催したが、昭和49年度のみ6日間の日程で実施した。



岩場での研修（別山岩場）

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は24名だった。最多は昭和50年度の34名、最少は昭和49年度の17名だった。主任講師は、澤村幸蔵と恩田善雄が各2回、伊藤久行、野村哲也、平田恒雄が各1回担当した。

(3) 一般山岳団体指導者冬山研修会

【研修時期・期間・場所】

2月上旬、2月中旬、3月上旬・6～7日間・登山研修所及び人津谷、千石前進基地、大日岳周辺、粟巣野スキー場

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として、鋏崎山、大品山方面、または、人津谷、前大日岳方面において雪中露營技術（天幕、雪洞、イグルー）、山岳スキー技術、雪上確保技術などを実施した。講義として、「救急法」、「積雪と雪崩」、「冬山気象」、研究討議として「一般山岳団体の諸問題」等をテーマに実施した。

【エピソード】

昭和49年度は、入山初日の夜に約40cmの降雪があり、その後さらに多量の降雪が予想されたため、冬山前進基地への入山を諦めて急遽下山した。下山路は随所に雪崩が発生し、非常に危険な状態となったため、途中の人津谷出合でビバークす



人工岩場での雪壁登はん研修

ることを余儀なくされた。

昭和50年度も、入山中に約1mの降雪があり、雪崩の危険が予想されたため、造林小屋跡に3日間停滞した。このような状況下でも、講師は安全確保した上で積極的に研修を行った。毎朝7時にはテントを撤収し、いつでも行動に移ることができる態勢を整えた上で、スキー技術やイグルー構築等の研修を行った。

この研修会は、基本的に7日間の日程で開催したが、昭和49年度のみ6日間の日程で実施した。

昭和42年度の登山研修所開所以来続いていたこの研修会は、昭和53年度をもって終了した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は18名だった。最多は昭和46年度の26名、最少は昭和51年度の10名だった。主任講師は、出堀宏明が3回、寺田甲子男、遠藤登、定行吉信、松永敏郎が各1回担当した。



人工岩場垂壁での研修

4 女子登山指導者を対象とした研修会

この研修会は、女子登山指導者を対象に、登山に関する基礎的知識と実技について研修を行い、リーダーとしての資質を向上させることを目的としたものである。

女子登山指導者研修会

【研修時期・期間・場所】

7月下旬・6～7日間・登山研修所及び劔岳周辺

【研修内容】

この期間の研修会では、実技研修として、劔沢周辺で、歩行技術、生活技術、危急時対策等の研修を行い、研修所において、「登山計画」、「登山の医学」、「夏山気象と天気図」の講義、「女子登山のあり方」、「新人の指導法」をテーマにした研究討議、ロッククライミング訓練施設を利用した岩登りの基礎技術の研修を行った。

【エピソード】

昭和48年度には、バリエーションルートでの研修も行った。上級班は八ツ峰上半及び源次郎尾根、初級班は別山尾根ルートから劔岳に登頂した。



雪上での支点構築研修

昭和49年度の講師陣は、実技指導を男性講師が担当し、テント内での生活指導や研究討議の指導を女性講師が担当したことで、山では厳しく、テントの中では楽しく過ごすという方針が守られ、良い雰囲気で行われた。

この研修会は、基本的に7日間の日程で開催したが、昭和49年度のみ6日間の日程で実施した。

昭和44年度から毎年開催されてきたこの女子登山指導者研修会は、昭和49年度をもって終了した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は27名だった。最多は昭和49年度の32名、最少は昭和48年度の24名だった。主任講師は、高島誠、恩田善雄、山崎安治、澤村幸蔵が各1回担当した。



雪上訓練

5 集団登山の指導者を対象とした研修会

この研修会は、集団登山（夏山及び無雪地域の登山に限る）の指導者を対象に、集団登山に必要な知識と登山技術に関する研修を行い、指導者としての資質の向上を図ることを目的としたものである。

集団登山指導者研修会

【研修時期・期間・場所】

5月下旬、6月上旬、7月上旬、9月上旬・5～6日間・登山研修所及び雷鳥沢、立山、劔沢周辺

【研修内容】

昭和45年度に高等学校教員を対象に第1回目の

研修会を開催した。昭和46年度以降は中学校教員も対象に加えて実施してきた。

実技研修として、生活技術（山小屋の利用上の心得）、歩行技術（歩き方、雪溪の通過、装備の点検、ザイルの使用法）、救急法、天気図作成、観天望気

を実施している。

講義としては、「登山計画の立て方」、「登山事故と教師の責任」、「山岳気象」、「集団登山の安全対策」等があり、研究討議のテーマとしては、「集団登山の計画上の問題点について」、「集団登山の実施上の問題点について」等があった。

【エピソード】

昭和50年度までは研修期間が5日間であったが、昭和51年度から6日間で開催した。入山しての実技研修は、昭和45年度が3日間（雷鳥荘、夏山前進基地泊）、昭和46年度が3日間（雷鳥荘2泊）、昭和47年度が2日間（一ノ越山荘泊）、昭和48年度からは4日間（雷鳥沢幕営、夏山前進基地2泊）であった。この研修会は、日程や実技研修会場を変更し、試行錯誤を繰り返しながら運営してきた。

昭和53年度には研修期間を1日短縮して5日間とし、名称も集団登山指導者講習会と変更した。

昭和45年度の研修生は、最高年齢の62歳をほじ



雪上訓練（浄土川上流）



ツエルト使用法の研修（雄山山頂）

め全体的に高年齢層の研修生が多かった。登山経験では、幕営経験のない初心者から海外登山経験者まで、技術、体力、経験に大きな隔たりがあった。入山日には室堂平において激しい風雨となり、剱沢前進基地まで行くことができず、雷鳥荘に宿泊することを余儀なくされた。このような状況の中、最後まで研修生が一団となって行動できるか危惧されたが、一人の落伍者もなく研修を終えることができた。

この研修会は昭和53年度をもって終了した。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は27名だった。最多は昭和49年度の39名、最少は昭和52年度の13名だった。主任講師は、徳久球雄が3回、青柳安昭が4回担当した。

6 山岳遭難救助の指導者を対象とした研修会

この研修会は、山岳遭難救助の指導に当たっている者を対象に、遭難救助に関する知識と実技についての研修を行い、指導者としての資質の向上を図ることを目的としたものである。

山岳遭難救助指導者研修会

【研修時期・期間・場所】

年度によって4月下旬、5月上旬、5月中旬、6月中旬に開催・5日間・登山研修所及びブナ坂、雷鳥平、雑穀谷、弥陀ヶ原

【研修内容】

この研修会は、昭和47年度に第1回の研修会を開催した。参加資格としては、都道府県における山岳遭難救助組織の指導的立場にある者で、都道府県教

育委員会が当該都道府県の山岳遭難組織（警視庁・警察本部・山岳連盟・山岳協会）と協議のうえ推薦する者（男子）とした。原則として、各都道府県1～3名とし、計60名を定員とした。

実技研修として、徒手搬送、担架等による搬送、雪上における搬送、岩場における搬出（ザイル等の利用、ワイヤーロープ・ウインチ等の使用法）等について実施した。講義としては、「山岳遭難の実態と



張り込み救助訓練

問題点」、「搜索と救助の計画」、「ヘリコプターによる救助」等、研究討議としては、「救助技術に関する諸問題」、「救助組織の運営と隊員の資格」等をテーマとして実施された。

【エピソード】

昭和48年度からは、1泊2日の日程で入山し、雷鳥平のロッジ立山連峰等に宿泊して雷鳥沢周辺でスキーやスノーボードによる雪上搬送等も実施した。また、昭和48年度から昭和51年度の4年間は、自衛隊の協力により、大阪八尾の基地から来たヘリコプターによる救助訓練も実施された。

昭和50年度には、入山しての実技研修を3日間

に増やした。研修生に事前予告をしないで、登山者2名が山中で負傷し救助を求めているという想定で、早朝5時から遭難救助の模擬訓練を実施した。出勤から救出まで全ての計画と運営を講師に頼ることなく研修生だけで行った。このような模擬訓練は初めての試みであったが、研修生は終始真剣な態度で取り組み、有意義な研修となった。

【参加人数・主任講師】

この期間の平均参加者数は44名であった。最多は昭和48年度の48名、最少は昭和52年度の38名だった。主任講師は、澤村幸蔵が2回、沢木勇二が4回担当した。



ヘリコプターによる救助訓練



研修所外観（昭和47年）

昭和 48 年度から 52 年度の 5 年間、登山研修所は毎年 1 本（16 ミリカラー；25 分）の教材用映画の制作に取りかかった。意図するところとしては、岩登り技術（基礎編・応用編）、氷雪技術、山岳スキー技術、山岳遭難救助技術の基礎的な知識や技術を分かりやすく解説するとともに、視聴覚を通じてそれらを正しく理解させ、安全登山の普及に寄与することである。

制作に当たっては、山岳における動画撮影経験に富んだスタッフ及び機材を揃え、既に数多くの優れた作品を制作し、高く評価されていた中日映画社と契約した。昭和 51 年末には、この教材用映画を各都道府県等で行う講習会に活用できるように、中日映画社から市販（各編 12 万円）されるようになった。

最初に制作した岩登り技術（基礎編）では、石岡繁雄、澤村幸蔵、野村哲也、羽田栄治、中屋健式、松永敏郎が教材映画制作委員を務めた。岩登

りの撮影は、研修所及び劔岳周辺で行われ、各種実験、テストの撮影は、通産省工業検査所、三河繊維技術センター及び国立鈴鹿工業高等専門学校で行われた。氷雪技術、山岳スキー技術、山岳遭難救助技術は、金坂一郎、松永敏郎、湯浅道男が中心となって制作した。

- (1)「岩登り技術（基礎編）」（昭和 48 年 11 月完成）
モデル：高田直樹、田山勝ほか
- (2)「岩登り技術（応用編）」（昭和 49 年 11 月完成）
モデル：重廣恒夫、桜井洋介、高田直樹
- (3)「氷雪技術」（昭和 50 年 10 月完成）
モデル：重廣恒夫、山本一夫
- (4)「山岳スキー技術」（昭和 52 年 3 月完成）
モデル：小林政志、北山幹郎、柳澤昭夫
- (5)「山岳遭難救助技術」（昭和 53 年 3 月完成）
モデル：松永敏郎、山本一夫、梶田正、降旗義道、近藤邦彦、高井充ほか

登山技術映画

企画文部省
制作 中日映画社

- 岩登り技術(基礎編)26分
- 岩登り技術(応用編)25分
- 氷雪技術 25分

16ミリカラー 3巻

販売価格 各120,000円
〔8mmプリント各43,000円〕

お問い合わせは一興 中日映画社 ●東京本社 東京都港区港南2-3-13 ●名古屋本社 名古屋市中区三の丸1-6-1
☎03(471)2211内線520,544 ☎052(201)8811内線2276~7

企 画 意 図

登山は自然を相手に、誰でも楽しめるスポーツです。しかし登山と名がつく以上、少なくとも安易な気持で行動することは許されません。一見、登山は単純なスポーツのように見えますが、そこには、厳しい自然、げげしい困難、そして大きな危険がひそんでいることを忘れてはなりません。まず、それらに対処するためには、登山の基礎的な心がまえを習得することです。さらに、度重なる山行の経験、たゆみない研修の結果が、きっと、あなたの登山を、心ゆくまで楽しませてくれることでしょう。

* * *

この映画は、登山の技術、とくに「岩登り技術」の基礎と応用、「氷雪技術」を体系的に解りやすく説明するものです。

(株) 中日映画社作成のチラシ

「立山連峰」の発行

Topics

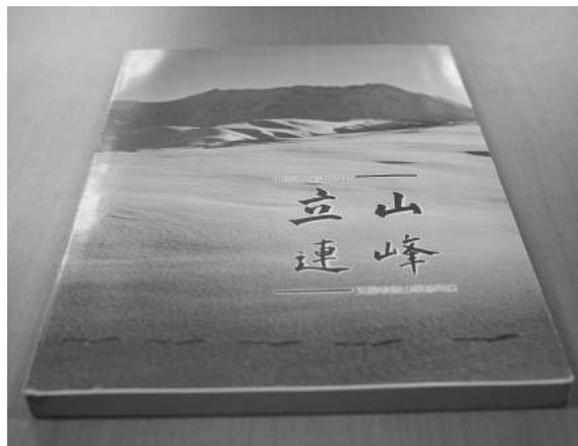
昭和46年6月の立山黒部アルペンルートの開通以来、立山連峰を訪れる登山者や観光客は増加の傾向にあった。しかし、これらの人々の多くは、立山連峰の大自然の景観に魅せられ、そこにある歴史や文学、伝説、動植物等にはあまり関心がないように見受けられる。

このため、当地を訪れる登山者に立山連峰を理解して、より楽しい山行となるよう、立山周辺に関する歴史、文学、伝説、動植物、気象、地質及び登山ルート等について研究されている方々に執筆を依頼し、「立山連峰」(B6、160ページ)を発行した。

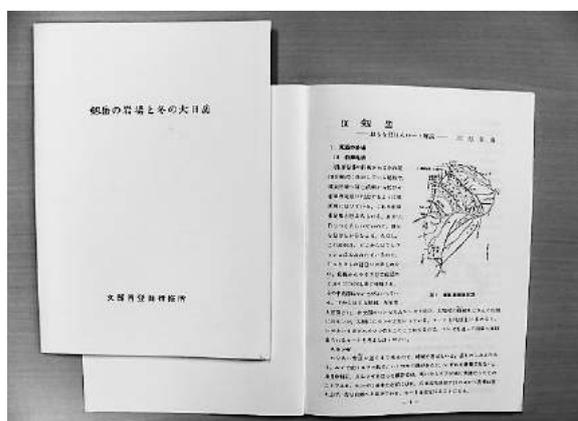
執筆は、石坂久忠、植木忠夫、太田芳之、坂井誠一、澤村幸蔵、進野久五郎、中田勇吉、広瀬誠、藤井昭二、舟田久之、横有恒が担当した。横有恒は、第1章で「文部省登山研修所 - 創立から今日まで -」を執筆している。

この本の中に書かれている「劔岳 - おもな登山ルート解説 -」(執筆：澤村幸蔵)と「大日岳 - 積雪期ルート解説 -」(執筆：石坂久忠)は、別冊として、研修会参加者に配布してきた。

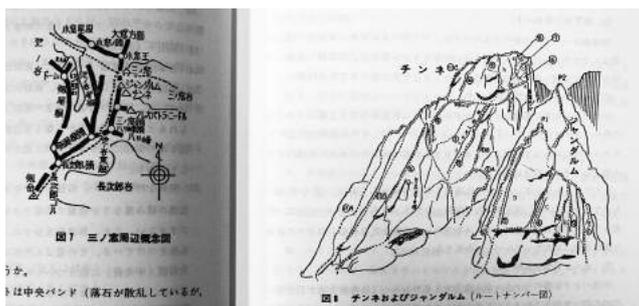
(並木 孝)



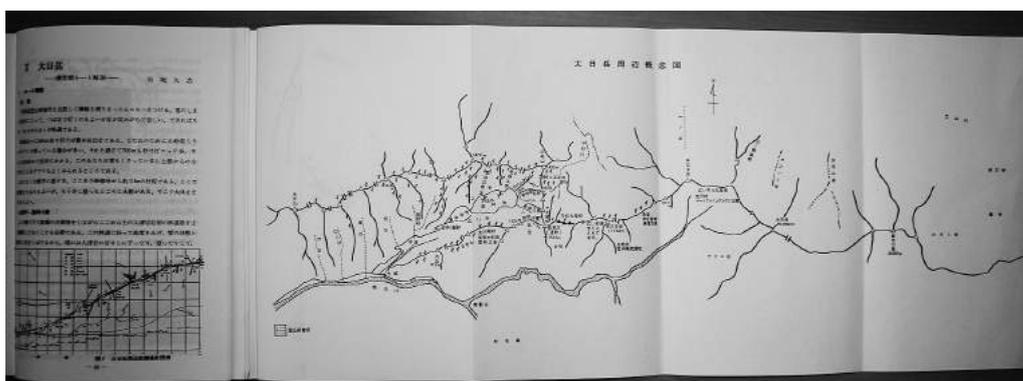
「立山連峰」(昭和48年8月発行)



別冊「劔岳の岩場と冬の大日岳」



三ノ窓周辺、大日岳の概念図



新しくできた防火水槽に単に水を張っておくだけではもったいないと、水泳選手であった当時所長の鈴木祐一の考案で、防火水槽を千寿ヶ原の子供たちが安全に水泳や水遊びができるようなものにする事となった。技官であった私とともに、コンクリート製の水槽をデッキブラシで隅々まで磨いて綺麗にし、塩素を混ぜた水を張った。山の水は冷たいので夜のうちにプールいっぱいにし、日中に水温が上がるようにした。

夏休みなど、日中には子供たちがプールを目当てに来所するようになった。子供たちは、水遊び

の途中で寒くなると、水から上がってコンクリートの面で甲羅干しをしながら体を温めていた。当時、千寿ヶ原の子供たちにとって、一番近いプールへ行くには、富山地方鉄道に乗って小見小学校まで行かなければならなかったので、子供たちやその親御さんに大変喜ばれていた。

鈴木祐一が所長を退官する頃には、プールで遊んでいた子供たちも中学生となり、プールとして使用されることはなくなった。それ以降は鯉が泳ぐようになった。

(佐伯正雪)



千寿ヶ原の子供たちで賑わった防火水槽



人工岩場から見た防火水槽